

美濃加茂市議会文教民生常任委員会行政視察報告書

令和 6 年 7 月 13 日

美濃加茂市議会議長 森弓子様

文教民生常任委員会

委員長 金井文敏

■目 的 子育て、教育の推進

■期 間 令和 6 年7月2日(火)～7月3日(水)

■視察先 ①7月2日(火)

午前 洛風中学校(不登校特例校) (京都府京都市)

午後 ひきこもり相談センター (兵庫県明石市)

②7月3日(水)

午前 不登校支援、青少年交流文化館いぶき (大阪府 豊中市)

午後 発達支援システム (滋賀県 湖南市)

■参加者 永田典男

瀬瀬源太

坂井文好

森 弓子

柘植宏一

金井文敏

田口智子

岸 一夫

藤吉 誠 議会事務局次長

渡辺明美 教育委員会事務局長兼教育総務課長

渡辺真理子 福祉課長

「京都市立 洛風中学校」の取り組みについて

場所 洛風中学校

日時 7月2日(火)10:30~12:00

不登校を経験した子どもたちが学ぶ京都市立学校は学びの多様化学校(不登校特例校)で、特色のある教育課程を独自に編成し、年間授業時間数を770時数(他の学校は1015単位時間)に減らしてあり緩やかでゆとりのある学習環境を提供しています。また、「ふれあいの杜」という教育センターがあり不登校を経験した児童生徒が在籍校に籍を置きながら自分の



のペースで自学自習できる場所などもありました。入学という制度はなく、転入のみでした。SC(スクールカウンセラー)は5名で毎日1人の先生が対応していました。SSW(スクールソーシャルワーカー)は1名の対応でした。始業は9時半で一般の生徒より遅めにして重ならないように配慮されています。学校では常に孤立しないように先生がついている。開校は平成16年で21年目でした。通学域は市内全域で33~34校から通っています。はじめは山のおじさん事業からで先生をおじさんおばさんと親しみを込めて呼んでもらっていました。不登校予備軍でもOKで知らない人なので打ち解けて安心感があった場所。

洛風の誓い「責任を持つ」この近いが生徒の自立心と自己肯定感を高めていると感じました。

1クラスは15名で4クラス

授業は学年ごとに行いますが、それ以外は縦のつながりを大切にされホームルーム等は「ウイング」と呼んでいました。

方針は「もう一度学校生活を始めてもらう」でした。

「学びなおす」ことを取り除くことで学習のし直しはやらない。スタッフ（先生）と一緒に解決していく。そして、地域の hub としての学校を目指してアセスメントを基に基本方針を立ててみえました。

転入は5月と10月の2回（随時にすると生徒への影響があるので）

現校長が本年4月に赴任したときに感じたことは「第2、第3の洛風を作らないのか？」でしたが、1～2週間で考えが変わったとのことでした。公立学校なので市内を先生が移る（市内をまわっている）ので、生徒との接し方（洛風で学んだこと）を輸出することが大事なのだと。登校して安心して過ごせることを体感して普通の学校に戻すことを大事にされていました。実践は、生徒への対応が丁寧で、親との連携を大切にされていました。



「明石市 ひきこもり相談センター」の取り組みについて

場所 明石市役所

日時 7月2日(火)15:00~16:30

ひきこもり状態の本人や家族からの相談に応じる専門相談窓口です。本人や家族からの相談に応じるだけでなく、当事者会や家族教室の実施、出前講座、支援関係機関ネットワークの構築、啓発活動なども行っています。

「ひきこもり」とはどんな人のことを指すのか。

厚労省の「ひきこもりの評価、支援に関するガイドライン」より



“様々な要因の結果として社会参加を回避し、

原則的には6か月以上にわたって、

概ね家庭内にとどまり続けている状態“

- ・実態はさまざまで、その特徴はひとくくりできない。
- ・家族以外との対人交流がなく、就学・就労などの社会活動をしていない状態。
- ・単一の疾患や障害の概念はなく、状態像。
- ・ひとつの原因から生じるわけではなく、さまざまな要因が複雑に影響し合う背景から生じる。誰にも起こり得る可能性がある。

明石市は、11年連続人口増で住みよいまちでした。2022年のひきこもり者は3700人ぐらいだろうとの推計をされていました。そのうち百数十人を対応されています。平成30年にこころのケアねっと会議を立ち上げて専門部署は平成31年に設置された。

中学校区に地区担当がいる。

精神保健・ひきこもり、自殺未遂者、難病支援

あかし保険所内で県から引き受けている。

ひきこもりの入り口

不登校から高校受験できずひきこもりになる。家族も含めて相談に乗っている。接触できない問題を含めて月一回ケースカンファレンス、事例検討会。

多角的支援が必要である。

本人の困りごとを和らげる。

SNS やメールでの相談が増えている。

ひきこもりの状況

中心は 30 代 40 代

10 代で→社会問題→ひきこもり

男女比率は2:1

5 年未満20.7%、10 年未満は11.7%

母親からの相談が36.5%

80-50問題、70-40問題

市内 6 か所に相談窓口

高齢者宅を訪問した際にひきこもりの息子さんがいた等で発見することがある。

高校より所属がなくなる。

伴奏型支援

- ・学校に戻るための支援
- ・地域で生きていくための支援
- ・就労（出口支援）
- ・ネットワーク会議で検討している



最近はメタバース空間も利用している3事業者

・居場所は市内 4 か所設置している。

支援のポイント

エネルギーの回復（活動が停滞している）

メンタル支援

家族→本人が動く！（スモールステップ）

出口支援

学校との連携は難しい（学校現場に人材不足）

課題

福祉と教育、社会と学校



「豊中市 不登校支援（青少年交流文化館いぶき）」の取り組みについて

場所 青少年交流文化館いぶき

時間 7月3日（水）9:30～10:30

豊中市在住の不登校の小中学生を対象に、家庭と学校との中間的ステーションとして安心できる心の居場所を提供します。子どもたちが興味・関心のある活動を通してさまざまな生活体験を積み、人とのふれあいを深める援助をします。心のエネルギーを高めていく中で、学校への復帰することや自立して社会に関われることをめざしています。（豊中市教育委員会事務局より引用）



不登校は30日欠席すると残り日数を出席しても不登校生徒になる。

360人（H30）→880人（R4）と増えている。

心のエネルギー（豊中市教育委員会事務局より引用）

「心のエネルギー」は佐賀県教育支援センターによって提唱されているもので、「友達エネルギー」「学習エネルギー」、「家庭エネルギー」、「調節エネルギー」の4つにぶんるいされており、「生活を送るための楽しみ、喜び、安心感、満足感、充実感等」等から得られるエネルギーを指しさまざまな活動の中でこのエネルギーを感じ取り、蓄え、活用しているとされています。ただ、悪い状態においては、全体のバランスが悪くなったり、あるいはエンプティ状態（エネルギーが空っぽの状態）になったりしてしまい、何に対しても活動の意欲がわかなくなってくると考えられています。

1次（メンタルチェック）

- ・スクリーニング早期発見
- ・SSWチェックシート（観察参考）

2次（早期発見早期対応）

- ・不安定生徒（心のエネルギーをメンテする）

- ・別室登校（登校に留まってもらう取り組み）
- ・学びの多様化学校
- ・学校NG→フリースクール行ける児童生徒（出席認定）
- ・登館は10時より
- ・個人支援→2～3人支援（グループ）

↓NG

- ・訪問支援（大学生のボランティアによる良き姉、良き兄の取り組み）

SSWは全小学校に配置（市費）26名

社会的自立を目指す。

学校を否定しない。

他関係機関との連携は難しい。

SOSへの感度を高める必要がある。

経緯、アセスメンテ（一人ひとりに寄り添い子どもたちから教えてもらう）

アウトリーチを行う

令和5年より卒業式は各所属の学校があるから行わないがエールを送る会を開いている。

課題

教育と福祉の連携が大切である。



「湖南省発達支援システム」の取り組みについて

場所 湖南省役所

日時 7月3日(水)13:30~15:00

支援の必要な人に対して、乳幼児期から学齢期、就労期まで、教育、福祉、保健・就労・医療の関係機関の横の連携と、個別の指導計画による縦の連携を提供するシステムです。発達に支援の必要な子どもたちが自立して社会に参加できる力を育むために継続的で横断的な支援を実現しています。



「発達支援」は、障害のある児童やその可能性のある児童に対して、個々の発達の状態や障害特性に応じて、今の困りごとの解決と将来の自立と社会参加を目指して支援することです。療育を担っている機関として、児童発達支援センターや児童発達支援事業所があります。これらの施設では、幼児から小学生以上の児童に対して、集団や個別で支援が行われます。早期から介入することで、特性自体を治療することは難しいものの、いじめや不登校などの二次的な問題を予防することができると言われています。

教育と福祉の連携「つなぐ!」をシステム化して横の連携と縦の連携を効果的に行っている。今の時点での安心と支援が充実している。(他機関との連携が大事)

システム運用より 20 周年を迎えた。いきいき条例があってできている。

8課で連携(横の連携)

- ・就学前の相談、支援
- ・早期対応をしている。

義務教育期に自己肯定感を養う

関係機関と情報共有している。(縦の連携)

就労 25 歳を出口としている。(※本人のニーズに合わせて対応している)



家庭支援等（斜めの連携）（※隙間を埋める）

相談力が大事である。

困ったときに頼れることができること。

